

ユダか、ペテロか

(ヨハネ一三・二一〜三二他)

「ユダ(この裏切者)！」オーディエンスの叫びが会場に響き渡る。だが言われたほうもさるもの。「お前らのことなんて信じない。うそつきだからな」そう叫ぶや若きフォークの騎手はロック・シンガーになった。演奏したのは「ライク・ア・ローリング・ストーン」一九六六年五月一七日夜の事であった。そんなディラン氏だから、彼を知っている人はノーベル賞受賞後の顛末も「さもありなん」と思うのみ。ボブは稀代のトリックスター。今もオーディエンスを裏切り続けている。

閑話休題。欧米社会において「ユダ」が裏切り者の代名詞となつたのはひとえに今日の登場人物、イスカリオテのユダのゆえであるが、この男、イエスの物語においては実に魅力的な存在であり、かの芥川も(『Los Caprichos』、太宰も(『駆け込み訴え』)遠藤周作(『イエスの生涯』)もこぞつてユダの心象を描こうとしているが、そのような読みは教理的なものにはならない。そこで今朝はペテロとの対比から考えてみたい。

一、ともに裏切つた二人

今日の個所だけを読むとイエスを裏切つたのはユダだけのように思えるのは無理のないことである。確かに主は「あなたがたのうちのひとり、わたしを裏切ります。」と言っているし、実際にユダが銀貨三十枚で彼の師であつたイエスを売らなければその後の展開はないといえる。しかしその後はどうだろう。ユダ以外のイエスの追従者は死に至るまで忠実であつたのだろうか？否、である。実際マルコ二・五〇には「すると、みながイエスを見捨てて、逃げてしまつた」とあり、その中にはつかまれた亜麻布を脱ぎ捨て、脱兎のごとく逃げ出したもの(よくマルコと推測される)までいたことが記されている。このことは自他ともに認めるイエスの一番弟子シモン・ペテロも例外ではない。ルカ二二・三二以下においてイエスはペテロの三度にわたる主の否認を預言され、そのことばは実際に成就した。このように考えるとユダだけを裏切者にして彼だけに汚名を着せるのはどうだろうか。もう一度言おう。確かにユダは裏切りの先鞭をつけた存在ではある。しかし結局弟子たちはみなイエスから離れていったのであり、かつそのことがなければイエスが栄光を受けることもなかつたのだ(三二節)。

二、二人を分けたもの

このように、ペテロもユダも等しくイエスを否み、裏切つたのであるが彼らのその後は好対照である。まずはユダであるが、マタイ二六・三によれば彼は自らのした罪を悟り後悔したことが記されている。彼は受け取つた銀貨三十枚(邦貨換算で百二十万円ほど)を返し、「私は罪を犯した。罪のない人の血を売つたりして」と語つた。これだけを見れば、彼は深い悔い改めに導かれていたように見えなくもない。だがそんな彼は「自分で始末することだ」との宣告に従い、結局自死してしまふ。

ではペテロはどうだろう。イエスの捕縛のち、師の消息を知ろうと彼は外の中庭にいたが、そこで預言の通りに鶏が鳴く前に三度イエスを否認してしまふ。聖書はその後ペテロがその場を離れ、激しく泣いたことを記している。問題はその後だ。ペテロはイエスの復活の時まで生きのびているのだ。自殺大国、自己責任大国の日本人的な視点から見ると、だれしもユダのほうに肩入れしたくなる。ユダは少なくとも自分の罪を引き受けている。それに比べてペテロは泣くだけ泣いて、裏切つたままおめおめ生き延びたのだ。無様な奴だ。そのように思う人が少なくない。しかしこれは間違つた解釈である。というのもペテロは自分の罪の深さに泣くと同時に、自らの

力ではそれをどうにも出来ないことを知つたからである。対してユダは最後まで神の前にへりくだることができず、自分でけりをつけてしまつたのである。

* * *

ペテロとユダ。この二人の明暗を分けたものは罪の認知とへりくだりの有無である。一人は自分の罪を自分で始末することを運び、一人は自らの罪の深さは自分で始末することさえ不可能であり、立ち直るためには神の前に出るしかないことを悟つた。善男善女の考えではペテロは無責任のように思える。しかしこの世でもこれに類する制度があることを覚えるとき、この真理は多少なりとも理解しやすくなる。それは自己破産である。多重債務↓自転車操業となつて借金が雪だるま式に膨らんだ人に与えられた救い、それが自己破産である。しかし自己破産するためには、まずは降参である。自分で作つた借金の支払い能力がないことを認めなければならぬ。しかしそうするならば「帳消し」の恵みにあずかれる。神の国の赦しはそれ以上だ。ペテロもユダも、わたしもあなたも、どんな罪人も赦される。友よ、夜の暗がりに消えつばなしになつたユダにならず、光なるイエスのもとに戻ろうではないか。